

令和8年度第1回県立高等学校将来構想審議会 会議録

開催日時 令和8年6月17日（水）午前10時から正午まで

開催場所 宮城県行政庁舎4階 特別会議室（宮城県仙台市青葉区本町3丁目8-1）

出席者 別紙「出席者名簿」のとおり

1 開会（事務局）

挨拶（宮城県教育委員会教育長 小野寺 邦貢）

皆様、おはようございます。4月から宮城県教育委員会教育長を仰せつかっております、小野寺でございます。どうぞよろしくお願いいたします。本日は大変お忙しい中、御参集賜りましてありがとうございます。開会に当たりまして、一言御挨拶を申し上げます。

日頃から本県教育の充実・発展のため、御指導、御協力をいただき誠にありがとうございます。また、このたびは大変御多用のところ、本審議会の委員をお引き受けいただき、心から御礼申し上げます。

本審議会は、本県の県立高校の在り方に関する総合的かつ基本的な構想について審議いただき、本県の高校教育の更なる充実・発展に活用してまいりたいと考えております。

今年2月に「次期県立高校将来構想答申」をまとめていただきました。委員の皆様には、長期間にわたり熱心に御議論いただきましたことに対し、改めて御礼申し上げます。

県教育委員会では、この答申を受けまして、今年の3月に「宮城県立高校将来ビジョン2026→2040」を策定いたしました。年度でいうと全部で14年度にわたる計画でございます。

急速な少子化の進展や、それに伴う高校教育に対するニーズの変化を踏まえながら、宮城県全体を一つの「学校」としてとらえ、どこに住んでいても質の高い学びにアクセス出来る環境を整え、本ビジョンに掲げる高校教育の創造的再構築を実現してまいりたいと考えております。

今年度は、この将来ビジョンに基づき、最初の5年間、全部で14年に渡る計画と申し上げましたけれども1年目の令和8年度は除きまして、来年度の令和9年度からそうしますと13年度に渡ります。これを前期・中期・後期って分けるのか、3つの期間に分けまして、最初の期間の5年間、前期計画というのか、あるいは第1期計画というのか、第1次計画というのか、呼び方につきましては、皆様のご意見をいただきながら確定してまいるわけではありますが、最初の5年間の実施計画を策定することとしております。この実施計画には、高校教育における具体的な取組を盛り込むことから、本日は、取組内容を想定しながら、その実効性を一層高めるために必要な視点や方策について、皆様から忌憚のない御意見を賜りたく存じます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

2 会長及び副会長の選任（以下のとおり選出）

会 長 国立大学法人東北大学大学院教育学研究科 教授 青木 栄一 委員

副会長 国立大学法人宮城教育大学教職大学院 教授 田端 健人 委員

【青木会長あいさつ】

ただいま選任いただきました青木と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

先ほど、教育長からも御案内がありましたように、2月に出されました将来構想は副題にありますとおり2040年を最終的な目標年度としております。

今年、昨年生まれた子どもたちが高校生になる頃を想定しておりますが、その子どもたちは高校で学んでその後社会に出るわけですが、その子どもたちが人生の終盤に何を観るかというところ、多くの子たちは22世紀を迎えることになります。その子どもたちが、22世紀をどのような形で迎えられるかを想像しながら、この審議に当たりたいと思っております。

公平、公正な議事の進行に努めてまいりますので、御協力のほどよろしくお願いいたします。

【田端副会長あいさつ】

宮城教育大学教職大学院の田端健人と申します。

委員に選んでいただき光栄に思うと同時に、事の重大さに身が引き締まる思いであります。

今後10年後、各学年の児童生徒数が半減していく時代を見据え、全国に先駆けて最も合理的で子どもたちのためになる、あるいは将来の宮城県や日本のためになる高等学校の在り方を考えていかなければならない、非常に重要な立場にあると自覚しております。青木会長を支えながら、副会長として出来ることをしたいと思っておりますが、これからの日本のお手本となる将来像を描きたいと思っております。

答申のところでは全国的にもモデルになり得るものが答申できたと思いますが、さらに具体化していくと非常に難しい問題が山積していると考えております。皆様のお知恵とお力をお借りしたいと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

3 報告

【事務局（永田高校教育創造室長）】

資料1により、文科省N-E. X. T. ハイスクール構想関係基金の活用について説明。

【青木会長】

ただいま事務局から、国の高校教育改革の財源を活用した事業について御説明をいただきました。この件について御質問はございますでしょうか。オンラインの委員の皆様も、何かあれば挙手ボタンを上げていただければと思いますが、いかがでしょうか。

特に御質問がなければ、事務局から補足説明はございませんか。

【事務局（永田高校教育創造室長）】

1 点だけ補足させていただきます。

1 ページ目のとおり、今回は4つの事業としております。国から4拠点という制約があったため、農業分野については今回の基金活用ができておりません。基幹校の取組としては、県立高校将来ビジョンで位置づけましたとおり、非常に重要視しております。県農業高校については、従来より他の予算を活用しながら整備を進めてきたところではございますけれども、県水産高校や県工業高校については少し弱い部分がありましたので、今回選定したという経緯でございます。農業につきましても、今後予定されている交付金などを財源として活用しながら、しっかりと整備を進めてまいりたいと考えております。

4 議事

【青木会長】

議事 1、「みやぎ県立高校将来ビジョン 2026→2040 第 1 次実施計画骨子案について」、事務局から御説明をお願いいたします。

【事務局（永田高校教育創造室長）】

資料2により、第1次実施計画骨子案について説明。

【青木会長】

ありがとうございました。事務局から第 1 次実施計画の骨子案の検討について説明がありました。それぞれの検討項目について、検討の視点が示されましたので、皆様から御意見をいただきたいと思います。資料 2 の 5 ページ見ていただくと、三角形の矢羽根がありますが、そこにあることが、県教委としては、委員の皆さんから、御意見をいただきたい具体的な論点・検討事項ということになります。今から、それぞれの検討項目について、皆様から御意見をいただきたいと思っておりますので、およその次第からすると 11 時 45 分頃ぐらいまで、今から 1 時間 10 分ぐらいですけれども、そのぐらいを目途として、目安として、お話を伺っていければと思っております。持ち時間として、皆さんに伺えればと思いますので、3 分ぐらいでお願いしたいと思います。お時間に限りがありますので、示された検討の視点のうち、それぞれのうちどれかに焦点を当てて御発言いただければ大変ありがたいと思っております。また、皆様から見て左側左手の方に今 3 分と出ているウィンドウありますけれども、分数が表示されていますので、カウントダウンするので御参考にしながら御発言をお願いできればと思います。今、かなりボリュームのある資料を御覧いただきましたので、あと 1、2 分ぐらい、ちょっとお時間取って、気になるところを、御覧いただいて御意見いただければと思っております。その間に 1 点私から事務局にお尋ねしようと思った

のですけれども、この冒頭に御紹介のあったビジョンとそれからこの実施計画の関係について、最初のページで御説明いただいたかと思いますが、この実施計画の性格についてもう1度、教えていただければと思います。つまり、実施計画でどのぐらいの具体性のあることを決めなければいけないのかというところをお願いいたします。

【事務局（永田高校教育創造室長）】

資料の4ページ目を御覧いただきながら、聞いていただければと思いますけれども、全体としましては、実施計画の目次がこの第1章から第5章までということになっておりますが、特に例えば第1章とか第2章あたりというところは、県の方で中間案に向けて、これから調整してまいるというところになります。繰り返しになりますけど、第4章の部分は我々の方で御意見を聞きながら、こちらの方も中間案でお示しをしていくことになりますので、特にこの第3章のところで、この項目建てが将来ビジョンの方と合致しているような建付けになっておりますので、この中で配置以外のところで具体的な取組というところ、特にやり方の部分だったり、例えばその事業に盛り込むべき内容であったり、そういったようなところについて、御意見をいただいてこの中間案に反映をさせていきたいなというふうに考えてございます。

【青木会長】

どうもありがとうございました。それでは、名簿の上から大学関係、初等中等教育関係、教育行政・PTA関係、業界関係という順で伺えればと思いますが、御発言の準備ができた方からお願いいたします。

まずは、オンライン参加の後藤委員、いかがでしょうか。

【後藤委員】

大きく2点コメントいたします。

1つは、骨子案の5ページに関連すると思いますが、ネクストハイスクールは非常に魅力ある構想だと思います。参加する各学校の教員全体が、共通理解を持って臨むような研修や学校運営をお願いしたいと思います。昨年、遠隔授業に携わる教員の意識について研究した学生の成果によりますと、受信側教員が配信側と協働することの難しさや、生徒の学習状況の把握への不安が指摘されていきました。遠隔授業に即した授業改善の機会が必要ですが、それが配信や受信の担当者だけの業務と捉えられると他の教員から協力を得にくくなります。そのため、学校全体で相互配信・受信についての理解を高めていくことが必要だと思っています。

もう1点、骨子案12ページになります。アイデアルスクールの要素を盛り込んでいくことについてです。通信制高校に関する最新の国の調査報告書などを見ると、多様なニーズというのは学習内容だけでなく、毎日通いたいかわ週1回が良いのかなど、内容以上に学習ペー

スの多様性が指摘されています。そこにサポート体制をうまく入れていくことが必要だと思います。同じような調査だったと思いますが、私立の通信制高校がカバーできていない部分は、スクールカウンセラーやソーシャルワーカー、地域の支援機関との連携です。全県でもあまり多くない通信制高校である美田園高校を持っている本県の強みを打ち出してほしいと思います。それこそ県全体を 1 つの高校と捉えるということの実現になると思います。以上です。

【青木会長】

極めて具体的な御提案ありがとうございました。教員と生徒の視点から、社会実装の局面で非常に重要な留意事項に目を向けて頂いたと思っております。ありがとうございます。

続きまして長濱委員、お願いいたします。

【長濱委員】

私は骨子案の 20、21 ページのオンラインをいかに効果的に活用していくかという点に関連して発言させていただきます。

オンライン教育というと、全部画面の中で行われて、地域文化とかに根差した体験や実体験が不足するのではないかと懸念されがちですが、それが本当に宮城というその地域柄を本当に生かす教育につながるのかというところが、1 つ懸念としてあるかなというふうに思います。

一方、私は逆にオンラインを活用することで地域性を担保出来る側面もあると考えています。例えば、私は釣りが好きですが、今忙しくて年に 1 回いけるかいけないかというところでございます。その代わり行くんだったら本気で楽しみたいし、本気でそこで学びたいからこそ事前に YouTube とか合間の時間で見てものすごく調べて事前によく調べてから行き、結果釣れなかったとしても、それは一種の探究だと思っています。これって学習成果って言われた時にこれって学びなのかという問が 1 つ重要だと思っています。どうしても、オンラインの教育効果っていうものは、テストで見えやすい評価がちゃんと備わっているかっていうところもさることながら、実は今、生成 AI の台頭があって一種目下 100 点の意味合いが、他者由来の 100 点とその子が本当に色々四苦八苦して得られた 100 点っていうところでの意味合いが、ちょっと変わってきつつあるんじゃないか。そういう時には、やはり何かその体験を意味付けするような枠組、具体的には他者が実感でき、その子の成長が実感出来るあるいは、その子自身が点数だけでなく自分の成長を実感出来るなんかそういった仕組みというところで、やはり体験を 1 つオンラインと対面をうまく効果的に活用して、実現していく方向性は必要ではないかというふうに思っております。その時にはやはり、北海道の T-base（ティーベース）といったオンライン教育センターというような事例もございますけれども、やはり、平時においてやはり測れる学びをまずはしっかり質保障していくという側面と、あとはイベント的な学びというところでその探究の質をサポートしていくと

というようなところですね。なので求められる学習成果っていうことをしっかり念頭に置いた形の中で形態をしっかり分けて、その上でそれぞれで得られた学習成果を何か第 3 者も実感出来る枠組作りが必要なのかなというふうに思っております。私からは以上でございます。

【青木会長】

ありがとうございました。

田端委員は、副会長でもいらっしゃるの、後ほど、委員の皆さんから、まずは御意見をいただいてからということをお願いしたので、後ほどお願いしたいと思います。大西委員は本日御欠席ですが、事前に御意見等は寄せられておりますでしょうか。

【事務局（永田高校教育創造室長）】

事前には頂戴しておりません。

【青木会長】

承知いたしました。会議後、お寄せいただく可能性もありますので、それはまたこの会議に共有していただければと思います。また、大西委員の御専門からしますと、本日御出席の後藤委員が重なるところもおありと思いますので、後ほどもしも時間ありましたら後藤委員からですね、大西委員が、関わりそうなところを御発言、サポートいただければと思います。

それでは次のブロックに移り、高等学校に関わる委員の皆様からお話を伺います。早坂委員、伊藤委員、針生委員の順でお願いいたします。早坂委員、お願いいたします。

【早坂委員】

オンラインのところでお話しいたします。先日、河北新報の方に、仙台第二高校にオンライン配信センターを作るという記事が出てだいぶインパクトがありましたが、教育庁が推進するオンラインを重視した教育を仙台二高で新たに創造して、県全体の学びにつなげていきたいと考えております。その際に、私の前任校が、宮城野高校だったんですけども、宮城野高校でも配信事業やっておりました。さらに、ここに関わる場所では DX ハイスクールも事業推進校でございました。DX ハイスクールの方は、文科省のホームページに好事例として、載ってあるので、そこは後で御覧になっていただければと思うんですけども、配信事業の方は、成功した部分も非常にあって、Nits（独立行政法人教職員支援機構）の荒瀬先生（理事長）に見に来ていただいて、非常に素晴らしい成果だと言っていたことを記憶にしているんですけど、荒瀬先生は、宮城野高校の生徒の髪の色の方にも随分興味持っていたみたいで、こういう学校だなんていうところで、紹介できたのは私非常に嬉しかったんですけど、ただ 1 つやっぱり配信事業の問題点としては配信校にあまりメリットがないっ

ていうところが、私今非常に感じておりまして、やっぱり配信校にメリットがないと、持続可能にならないというところなので、配信校の事業をいわば二高の生徒のリアルな事業、データデジタル探究というところで深めて、それをさらに配信していきたいなと今構想を練っております。その際にやはり、どうしてもまだまだ高校の事業、知識注入型の授業が多くて、やはり学習環境をきちんと教員の方でデザインしてやって、生徒の学びの主体性をどうやって引き出していくのか、さらにそれを二高の生徒が、他の学校の生徒と学び合う中でいろんな形で関わり合うっていうところで、さらに新たな高校教育の学びを想像していければなと考えておりますので、ここの委員の方々からも色々御意見いただきながら、進めたいと思っております。よろしくお願い申し上げます。

【青木会長】

ありがとうございました。

互恵的な関係で、配信校と受信校を構築出来るというこれやはり動き出していけば行くほどそういうことが、よりクリアに課題として認識されていくと思います。先ほど、早坂委員がおっしゃったようにインパクトのあるですね、受け止めてをされているということでございますので、引き続きよろしくお願いしたいと思います。

やはりその互恵的な関係っていうところで言うと、教員の教員同士の関係、それから生徒の関係ですよね。いずれにしてもお互い学び合うことで、それぞれが成長するっていうことを支えるために、教育政策的に、教育行政的にどのようなその対策というか対応が必要かというその辺り資源配分のことも含めて、今後具体的な議論になっていけばと思います。

続きまして、伊藤委員、伊藤直美委員、お願いできますでしょうか。

【伊藤委員】

私の対応するところと言うと、専門学科系の学びとそれから本校には川崎校もありますので、多様な学びも少し関わってくるかなと思っているのですが、専門学科系の学びにおいても、今ちょうど話題に青木先生にまとめていただいたようなより具体的なとか、より実践的なものを経験する、体験から学ぶということがとても重要だなと思っていますし、そういった場面でより生徒が学びを深めているなという実感も本校でもあります。特に、林業の学びについては地域の関係機関の方々が本当に全力で支援していただいているおかげで生徒が成長しているなという実感があります。生徒の方も座学よりも、実際の勉強の方がより興味を持ってやっているというところなんです。ただ、今のお話もありましたように、企業様にとってはどんなメリットがあるのだろうかということをちょっと考えてしまってますね。例えば、このような同じような学びを、例えば農業の他の分野とかあるいは商業のところ本校の場合ですと、商業の分野でもやればいいなと思っているのですが、そういった実際の企業の方々あるいは現場の方々にとってどんなメリットがあるのだろうかと考えてしまうところもあります。実際に、講師料をお支払いしたり、そういうことはしているのですが、

そこの部分はどうかののだろうかということですね。それは、時間的に、将来的に学んだ生徒たちがその分野に貢献出来るようになるっていうのが 1 番のメリットになるかなと思うのですが、そういう点が見えるように作っていかなければいけないなということを感じています。そこのところで、学校としても躊躇してしまうところもあるかなと思っています。

それから、多様な学びで本校は川崎校があって、DX スクールで、色々資源的なものを配置していただく予定もあるのですが、試行的に本校の生徒との関わりという事を、修学旅行一緒に行ったりとかですね、行事を一緒にしたりとかできないかということで、小さい学校の生徒は、大人数の関わりが苦手というところがあるので、それを可能な範囲で経験するきっかけになれば、ということを試行的にやっております。そういったことも、本校と分校とのメリットでもあるかなと感じております。以上です。

【青木会長】

はい。どうもありがとうございました。産業界との連携。これ非常に重要だとされているわけですが、お互いにどうメリットを見出していくのかということについては、後ほど産業界からいらしていただいている委員の皆様から伺えればと思いますが、ちょっと事務局にですね、伺えればと思いますが、先ほど、NEXT ハイスクール事業で、これポンチ絵を見せていただいていますけれども、こういうポンチ絵に至るまでにはやはり全産業界とのこう調整というか協議の上でこの形になっているわけですので、現状今把握されている形でその企業の皆さんとどうお互いメリットを見出せそうかっていうようなところですね、御紹介いただければと思います。

【事務局（永田高校教育創造室長）】

まず、少し網羅的ということにはならないんですが、例えば資料 1 の 1 ページ目、県の工業高校のところではいきますと、やはり生産性向上というところ、今回テーマにしておりますけれども、企業の皆様実際に行って伺っていくところでは、やはり、例えば、実際、企業の活動、生産活動の中では、最新だったり機械をコンピューター制御の設備で、実際やっているというところは非常に多くて、そういったところがしっかりできないとなかなか人材の確保というところは難しいというふうに伺っていますので、そういったところに長けた人材がやっぱり居てもらえると本当にありがたいんだという話を伺っていました。そういったことも踏まえて、例えば、県工業高校の学びというところもそういったところにつながるようなもの、そういった意味で、実社会と結びついたというところで行くと、基礎として例えば今やっているような、工業高校で学びというのにも必要なんですが、その先につながるようなものというのを、今回この基金の方で設備も整備をして、全て高校で出来るわけではないんですが、卒業して就職した際に、そこにギャップが生じないようなところで、強く意識をして結果的に県内企業に目が向くというか、こういう企業の皆様頑張っているんだということも生徒の方分かってもらって、それが、例えば県内定着にもつな

がるのではないかというところが、我々としては産業界の皆様から見た時のメリットになるのかなというふうには考えております。

【青木会長】

ありがとうございました。まずは、主として人材面ですね。良い人材を育て県内企業で活躍していただく。あと、施設設備の関係では、かつては学校の中でスタンドアローンで色々な施設設備を整備して、生徒だけが使うという形だったと思いますけど、おそらく2パターン今後展開の可能性があるかと伺っていますが、企業に設置されているそういった施設設備を高校生が使っていただく、おそらくそれは使用料という形もあると思いますけど、逆に高校に置かれた施設設備を企業の方と一緒に使って何か商品開発をするというようなこともあろうかと思いますが、この辺りについては、現状どういう協議がありますか。

【事務局（永田高校教育創造室長）】

今御指摘いただいた2つの方向性というのは、非常にオープンという意味ではやっぱあり得るかなというふうに思っております。特に2点目の高校の方に設備を導入して、それを、工業高校、例えば県の工業高校だけではなくて、他の県内の工業高校ということもありますし、企業の方やできれば小中学生にも見ていただいてということも、視野に入れたものを今回施設として整備をしたいなと。そういったことで、この共同利用も進めていきたいなと思っております。

あと、1点目の企業様のものを使わせていただくということも1つ可能であればありがたいというところですけども、実際、取引先との関係がおそらくあって、設定だったりとかいうところが動かせないだろうということを想定すると、本格的なものというよりはこういった設備が実際企業で使われているんだというところを学ぶ場として、これまで以上に実際に企業の方にお邪魔をして、実際どういう環境で行われているのかというところを、高校生の方で、知っていくというところは非常に有用かなというふうに思っております。

【青木会長】

どうもありがとうございました。クローズなスタンドアローン型の高校教育モデルではなく、今後オープンな高校の教育というものを提供するモデルに転換ということですね。オンラインのこともそうでしたけれども、とにかく色々な主体と繋がっていくということで大きく転換期に向かっているということで理解しました。ありがとうございました。

お待たせしました。針生委員、千葉委員、松崎委員の順番でお願いいたします。

【針生委員】

本校では、今年度からオンライン教育センターを設置し、県内のいくつかの高校に対し、

オンラインによる授業配信を行っております。冒頭の後藤委員のお話の中で、受信側の教員と協働していくことや、受信校の子供たちの学習状況をどのように見取っていくかについてお話がありましたが、運用が始まった中で、担当する4人の教員もそのことについて頭を悩ませております。オンラインによる授業配信を行うに当たっては、教員側のスキルというのも今までと違ったスキルが必要となってきますので、教員をいかに研修で育てていくかという視点は、非常に重要であると感じております。研修というと、技術的な部分に視点が当たりがちですが、技術的な部分に加え、実際に子供たちの学びの見取りや、オンラインを通して、子供たちの主体性をどのように引き出していくかという視点で、教員のスキルを高めていくことが欠かせないと感じているところです。デジタルとリアルの効果的な活用という話もありますが、現状では、対面の授業を単にデジタルに置き換えている部分も多いということを感じます。オンラインならではの部分をどのように対面・リアルの部分と組み合わせ宮城県全体の教育力を高めていくかというのは、非常に重要な視点になってくると感じております。

もう1点、多様な学び方について今回の資料16ページにもあるように、夜間定時制のニーズで代替不可の部分についても十分な検討が必要であると感じます。不登校生徒にどのように対応していくかということは非常に重要な課題かと思いますが、例えば起立性調節障害の子供たちにとって朝起きて学校に登校するということが、大きなストレスになっているということは強く感じています。実際、中学校時代までほとんど登校できなかった子供が本校に入学し、朝のストレスから解放されることで不登校を脱している生徒もおり、そのような生徒の学びたいという思いをどのように実際の学びにつなげるかはとても大切だと感じております。夜間の定時制については、勤労学生に向けてという必要性は減少の傾向にはあるとは思いますが、多様な子供たちの学びを支えるためには、夜間定時制の存在も非常に大事な視点の1つなのではないかと感じているところでございます。以上です。

【青木会長】

はい、どうもありがとうございました。続きまして、千葉委員お願いいたします。

【千葉委員】

まず、グループ化して相互に配信するという点についてですけれども、本校、今年の入学生が600名を超えていますので、多様な生徒が入ってきているということで、それぞれの生徒に対して最適な学習活動をどうやって提供するかということで非常に頭を悩めています。公立高校も同じだと思いますので、1つの学校で完結するような、今までの指導の体制というのはやっぱり限界があると思います。グループ化して相互に交流をするというか、配信をするという取組をするということは非常に大切なことだと思います。特に、やっぱりコロナ以降、生徒たちあるいは保護者の意識もかなり変わってきて、学校は毎日行く、みんなと同じ時間に行って同じ時間に帰るというのが前提でこれまでの学校教育は進められて

きたのですけども、それに対して今疑問が呈されています。その結果として、この間、河北新報にも出ていましたけども、角川系の広域通信制高校 3 校で、3 万 6000 人の生徒抱え、10 年間で 10 倍になったということからもわかるように、生徒保護者は多様な学びを求めているというのも実際です。それぞれの生徒があるいは保護者が、自分の子供の特性に応じて学べるような環境を整えていくということは方向性としては非常にいい方向だと思います。

ただ、懸念されるのが、実際にどうかということで、例えば 6 ページにありますように、仙台市内のいわゆる進学校と言われる 5 つ学校と少し郡部の方の拠点校でとなっている 4 つの学校とそれをオンラインで結び、授業を受けられるようにするということについてです。郡部の学校っていうのは、どうしてもその地域の人口が仙台市内に比べてかなり減り方が早くなっているんで、幅広い学力層の子が在籍しています。その中からどの層に向けて仙台市内の学校の授業を提供するかという狙いが重要になると思います。そうすると、地方の学校の全ての生徒がそれに該当するわけではないので、こういう取組をやってどの層を狙いとしてそれでどういう教育成果を上げようとしているのかということをも明確化して、それを全ての学校の教員、それから生徒にも共通理解を持った上でやっていかないと、ただやるだけで終わってしまう危険があります。その辺のところを綿密に計画を立てた上、あるいは調査をした上で実施していくのが大切なのかなと考えています。

【青木会長】

はい、どうもありがとうございました。まず、6 ページの資料にありますように、まずは進学系拠点校でのピアグループの形成ということが打ち出されているわけですが、専門でもピアグループをどう構築出来るかというのは当然その研究課題というか検討課題ということですね。

【事務局（永田高校教育創造室長）】

ありがとうございます。資料 1 の先ほど見ていただいた工業のところにも記載しておりますけども、そこの一校で完結するということではなくて、同じ学びの質を持ったところで、共同でやっていくというところはそれは専門高校でも、変わらないというところがあるかなというふうに思っております。

【青木会長】

ありがとうございます。それでは松崎委員お願いいたします。続けて、PTA、それから教育行政の皆さんに、続けていこうかと思います。よろしくお願いいたします。

【松崎委員】

3 番の多様な学びの①アイデアルスクールの展開方法の留意点ということで、お話しさせていただきます。不登校経験がある生徒が多く通うことになることを考えますと、やはり一

番に心のサポートが必要になると思います。その上で、日々の登校の仕組みや授業の選択方法等自分で選択出来るような具体的な方法が求められると考えます。また、小中学校では不登校児童・生徒が増えております。本校も不登校の生徒がいることから、対策のヒントを求めて、先日、岐阜県にあります学びの多様化学校、草潤中学校に視察に行つてまいりましたので、そのお話をさせていただきます。まず、子どもたちの心の安定を重視し、子供たちに対して教員が共通認識を持って対応していることがとても素晴らしいと感じました。そして、社会的自立を目指した個々の学びを選ばせていることが大きな特徴だと感じました。新たな自分の良さを発見出来る場や社会と繋がれるような場を設けて体験活動をさせる等ヒントとなるものが多々あり、本校でも取り入れているところです。このように、社会的自立をめざし、教員がスキルを身に付け、柔軟に対応できるようにしたり、チーム力を高めたりすることが必要になってくると思いますが、そういったところが留意点として大きく捉えられるものではないかなというふうに思っております。

また、この来年度から広瀬 ideal 高校がスタートするということですが、入試の方法や選考等が難しいのではないかと予想します。先ほどの学校では、40名の募集に対して200人を超えるよう応募があったそうです。ですから、広瀬の学校も多く集まるのではないかなと思いますので、その辺りも考えていく必要があると思いました。以上です。

【青木会長】

ありがとうございました。おそらく国の方でもその高校入試についても議論が進んでいるところですので、そういうのも見ながら、選抜のことについても、考えていければと思います。ありがとうございました。重要な御提言をいただいたと思います。

続きまして、オンラインでご参加の齋藤委員もよろしければ、口火を切っていただけますでしょうか。

【齋藤委員】

私の方では、資料の2番の7ページ普通科の学びの検討の中にあります、連携協働体制の構築にコーディネーターが担う役割や必要性はどうかというところの視点でお話をさせていただければと思います。本日の話をお伺いして、オンラインや学びの多様化が進むにつれて、子供たちの学びへのニーズやそして社会的背景を持った子供たちへのしっかりとした学びの機会の提供といったところにつながっていて、新たな学びの想像というところに生み出しているところが、すごく嬉しく、楽しく思っているところでありました。ただ、子供たちこの高校での学びの機会といったところが出てきて、しっかりと学びの機会が創出されていることで、今度は学びのための学びではなくて、この学びが社会活動であったり、あとは今後の将来にどうつながっていくのかという視点も持ちながらの第一歩っていうところを考えますと、地域やそして企業との連携というところは、まさに今後につながる大きな一歩になるのではないかなというふうに思っております。ただ、こちらのところは学校単位

そして企業単位のお互いが連携を独自で取っていくっていうところは難しいかと思いますので、お互いがwin-winになるような関係性を構築する上では、ハブとなるコーディネーターというところの役割が重要になってくるのではないかというふうに思っています。これは、普通科の学びだけではなく、様々な形態の学校でも該当するものだとは思っておりますし、逆にこの地域課題この連携の中でつながって子供たちが地域課題を知って、その地域課題の解決に向けて、今の学びがそこにつながっているといったところでは、地域の中での子供たちが自身の存在価値っていったところを実感することにつながって、今後の県外の人口流出ですとか、人材の流出といったところの歯止めをかける一歩にもなるかもしれないですし、あとは企業にとっても人材の確保というところにもつながるというところでは、お互いが良い形で連携しあえることで、地域そして企業にとってもメリットがあるようなものにつながるのではないかなというふうに思いますし、子供自身も学びが、自分の存在価値であったり、この地域の中での自分の価値っていうところに実感を持って生活して、今後将来に向けて歩いていける一歩になるのではないかというふうに思っておりますので、是非この連携協働体制の構築といったところの視点の中で、ハブとなるコーディネーターの役割といったところ、しっかりしていただける人材というのを確保していただければというふうに思った次第です。以上です。

【青木会長】

はい、どうもありがとうございました。コーディネーターについて御指摘ありましたが、7ページの御説明のところでもコーディネーターの御紹介あったと思いますが、現状、今県内のコーディネーターの配置の状況やもしくは具体例、もう少し今の時点で御存知でしたら御紹介いただけますでしょうか。

【事務局（永田高校教育創造室長）】

資料2の7ページに記載しておりますが、学校魅力化コーディネーター、こちらは中新田の方で活躍いただいている方々ですけれども、その他に全体的なところで行きますと、地学地就コーディネーターということで、物作り人材の育成の確保と職場の定着の取組ということで、企業と学校を結ぶというような役割を担っていただく方を今11名おいて活躍していただいているというところがあったり、また、過去には、SSH、スーパーサイエンスハイスクールの中で、コーディネーターをお願いしてというようなところなんかもありますので、そういった場面場面で、専門の方、特に知見を持ちの方のお力をお借りしながら、企業なり地域とつながるようなところを意識してやっているというところでございます。

【青木会長】

どうもありがとうございました。コーディネーターは非常に多様な形で、もしかしたらコーディネーターという名称がついてないものもあるかもしれませんが、非常に多様

な方が、既に御活躍ということで今後もどんどん増えていくのではないかなと思います。確か、オンラインでの探究系の学習でも県内ではないと思いますけれども NPO がコーディネーターとして入って、複数の高校と一緒に学ぶみたいですね、そういうのもあったかと記憶しています。どうもありがとうございました。

続きまして、稲垣委員で続いて半沢委員、八巻委員の順番でお願いいたします。

【稲垣委員】

まずは、このような立派な資料を用意してくださり、ありがとうございます。私は皆さんのように専門知識があるわけではありません。ただ、今年の4月に、公立高校を卒業した子供が1人、現在高校1年生の子供が私立なんですけど1人と、小学6年生の子供が1人おります。同じように育ててきたつもりでも、一人ひとり、興味も進みたい道も違うのだなと日々実感しています。だからこそ、どのような高校を選んだとしても、将来の可能性は無限に広がっているんだというふうに、その子供本人が実感出来るような学校が増えていってほしいと願っています。

1つだけ、意見を申し上げます。12ページになりますが、アイデアルスクール、私も大変興味を持って拝見いたしました。13ページに求める生徒像と書いてありますが、多様な子供たちを受け入れてそれぞれが自分のペースで学べるという考え方はとても素晴らしいと思います。一方で、授業の時間数や学び方の違いによって、一人ひとりが異なる学習の道を選択する中で、子どもたちの間で目には見えない心理的分断や自分は違うという意識が生まれないよう、丁寧な配慮をお願いしたいと思います。以上です。よろしくお願いします。

【青木会長】

はい、どうもありがとうございました。では、続けて半沢委員お願いいたします。

【半沢委員】

よろしくお願いします。教育行政に携わっている立場で何点か申し上げたいと思います。

実は本市も令和元年度から教育改革を市長部局と一緒に進めております。今、第3ステージに入っているところであります。これまで大きく私自身が課題だなというふうに思っているのは、枠組とか改革の方向性というのが、いくら立派でも問題はそこで働くいわゆる教職員がどの程度理解するのか、ということが極めて重要だなというふうに思っています。私も忸怩たる思いをすることが結構あるんですけども、なかなかやっぱ理解をしてもらえないと。本市の学びの多様化学校を開校して4年目になるんですが、概ね非常に順調に行っていると私自身は評価しています。開校当初18名であった児童生徒が今38名まで増えました。今まで25名卒業生を出しておりますが、全て希望の進路に進んでおります。この学校をなんとかいわゆる学びの多様化に、私の立場から言うとどういうふうに白石市内の教育改革に繋がられるかということで、一昨年から研修の場として活用することを私が提

案して、各学校の校長先生等にも理解いただいて進めております。座学だけでは足らぬですね、やっぱり。そこで実際に、不登校経験者の子供たちに授業をするということを取り入れて、やってきておりますが、今まで約 50 人程度の市内の教員が研修をそこで行いました。振り返りを見ると非常に効果的なんですね。どういうふうに具体的に授業ですることが、寄り添うことなのかとかということが体感的に分かってきた。それで本市はですね、令和 7 年度の教育委員会の調べだと大きく不登校を減らすことができました。ピーク時と比較すると小中合わせて約 30%の子供の不登校の数を減らせておりますし、とりわけ小学校の低学年は約 80%以上不登校を減らすことができっております。これも 1 つには、いくつかの要因ありますけれども、1 つには本市の学びの多様化学校を研修の場に使ったからだろうと思います。私はアイデアルスクールを地方に展開していくことは絶対必要だというふうには思っておりますが、ちょっと懸念も実はありまして、1 つの学校の中に 2 つの学校を同居させること、我々も開校の時に、多様化学校を開校する時に検討いたしました、やっぱり非常にハードル高いというので独立型にしたので、この辺非常に大事かなというふうに思っております。先ほどの冒頭のところに戻れば、やっぱり働く教員の研修がどういう形でやるかというのはまさに重要だなというふうに感じております。以上でございます。

【青木会長】

はい、どうもありがとうございました。八巻委員お願いいたします。

【八巻委員】

どうぞよろしくをお願いいたします。

私は教育長になってまだそんなに経っておりませんが、長いこと中学校の教員として仕事をしてまいりました。中学校の先には高校がありますので、常に高校は意識して仕事をすることが多かったかなというふうに考えております。いろんな子供たちがおりますが、やはり勉強がどうしてもできなかったりとか、それから様々な理由で学校に来られなかったという子たちもたくさん見てきましたが、高校に進学するという中学校 3 年生の後半になったときに、やっぱりどんな子供でもここに行きたいという気持ちを持っているということが、大きなスイッチになってきたんじゃないかなというふうに思っています。先ほど申し上げたいろんな子供たちが、やはりみんな 100%に近いぐらいですね、確実に自分にあった学校を選んで、進学していった姿を、見てまいりました。卒業して少しして中学校に挨拶に来たときに「みんな高校楽しい？」と聞くと、「楽しいです」というふうに、答える姿をずっと見てきましたので、高校っていいんだなって、やっぱり行かせて良かったなっていうふうにいつも思ってきたところです。

ただ、この仕事に、携わるようになりまして、小学校も観る機会がだいぶ増えてまいりました。中学校としては、高校は身近な存在だったんですけども、考えますと、中学校の手

前には、小学校もございます。小中は、決してバラバラではなく、つながっているという部分が大きいかなというふうに思っています。小学校で習ったことを、中学校でというところを、非常に感じる部分がございます。義務教育は小中っていうふうに言われるんですけども、もはや今の時代、学校っていう括りで考えると、小中高校までが一緒ではないかなというふうに思う部分もあります。地元にも高校がございまして、御案内があつて、授業参観に行ったりしますと、中学校でヤンチャだった子も一生懸命勉強していたりする姿を見取りますので、高校に入る前の段階の中学校、それから小学校でどんな学びをしているのかというのもですね、この検討委員会は高校の検討委員会ですが、高校ということに特化する以前の問題として、小学校でどんな学びをしていて、中学校でどんな学びをしていてというのを見ていただくのも何かしら参考になるのではないかな。要するに、その先に高校というものがあるのではないかなというふうに、皆さんのお話も伺いながら考えたところです。ちょっと視点が違うかと思いますが、そのようなことも参考に考えていただければいいのかなというふうに思いました。どうぞよろしくお願いいたします。

【青木会長】

ありがとうございました。いえ、全然ちょっと違ったっていうより非常に重要な視点をいただいたと思います。事務局の御説明であつたと思うんですけども、ネクストハイスクール案件の説明だつたと思いますけども、中学校にも高校を開くみたいなのところあつたと思いますが、そこをもう一度ちょっと教えていただきますか。

【事務局（永田高校教育創造室長）】

はい。同じ資料になって恐縮ですけど、資料1の左下の、県工業高校のところ、やっていく内容は、四角囲みの中に入れておりますけども、黒丸の1番下のところ、校外スペースを設け、小中学生を始めとする地域に開かれたというところで、エリアにということで記載しております。こういった整備内容を今回の中でやっていきたいなというふうに思っております。AIで生成したイメージ図が右のイメージ図になっておりますけども、こういったところでハードルを低くして、こういったところに来ていただいて、そこから、交流する中で色々生まれるものも期待しながらというようにございまして、今、御指摘いただいた、小中学校での学びというところもこういったところで、接続していければなというふうに思っております。

【青木会長】

どうもありがとうございました。それでは、産業界の皆様に伺えればと思いますが、もうその先ほどのネクストハイスクールのポンチ絵でも明らかなように産業界の皆さんは、重要なステークホルダーもしくは一緒になって教育を提供するもう仲間というか本当に同じ目線に立っていただくといい時代だなと思っております。オンラインでご参加の関

委員にまず口火を切っていただければと思います。その後で、会場から佐藤拓実委員、須能委員、山田委員の順番でお願いできればと思います。お願いしていいですか。大丈夫ですか。

【関委員】

よろしくお願いいたします。関と申します。初めましての方もいらっしゃると思うので、私は今、会長がおっしゃったようにまさにビジネスと教育の掛け算で、専門性を持ちながらコンサルタントをさせていただいております。東北大学の方でも震災後に新事業を作るという目的で、社会人スクールをやらせていただいております。そちらの方で特任教授をさせていただいております。午後にも、実は仙台商工会議所さんで商品開発のセミナーを受け持っております、現地に行けず申し訳ありません。

私の専門性からその学びの質を高めるために、2つお話しさせていただきたいと思っています。1つはその5年間という実施期間において、どういう力をつけるのが好ましいのかという視点です。1つの参考意見として捉えていただきたいのですが、非常に今産業界、動いております、特に、資料で言いますと、5ページの上から2つ目の辺りになるかと思います。普通科の皆さんが、どのような、例えば事業展開や合同の探究が必要かというところに、その「つけるべき力」の話が絡んでくるんですけれども、今、産業界はAIで部下を育てておまして、ブルーカラービリオネアがニュースになっているとおり「人が手を動かすこと」に価値があるというふうに時代が逆転しております。給与も逆転しかけております。その中で、語弊があるかもしれませんが、やっぱり教わることとか調べられる知識に、価値がなくなっているというのが産業界の常識になっています。じゃあ社会人に今何が求められているのかというと、大きく分けて3つで1つは専門性です。2つ目が現場経験。そして3つ目が均質化できない課題へ向き合う力、解決力が求められています。とすると、紐づいて学校ではどういうことを学ぶ、もしくはそういう措置ができていると社会と接続がしやすいかという話です。電気が通じればという前提なんですけど、ネットやAIはこれから生徒さんたちが一緒に生きていく“AI ネイティブ世代”になりますので、記憶力より経験力が大変重要になってきます。パソコンの中の電気が通じているところで回っている一般的知識を知っていたところでパソコンに人間は勝てないと今言われているので、経験力というものがかなり強みに今後世界中でなっていくと。その時に、じゃあ知識ではなくその経験力をつけるためにはどういうことがいいんだろうというのを10年間社会人の皆さんと私たちがやってきて気づいたかと言うと、やっぱり、自ら考えて小さくやってみて失敗して社会実装の力をつけていくっていうその失敗力かなっていうふうに思います。ですので、導く側はその失敗をいかにたくさんさせてそこから考えるきっかけを設けるかっていうところがまず1つですね。

あとは、もう1つ発掘というところで、7ページでどのようにそういう企業さんを発掘していくかというお話になりますが、私は水産や農産の支援事業の専門家を宮城県の方でもさせていただいておりますけれども、やはり、そういう意欲的に変わろうと思っていらっしゃ

る、支援事業にエントリーしてくる方々とクロスオーバーしていくのがいいんじゃないかなというふうに考えています。変わる必要性を大きく求めてらっしゃらない方にやりましょう、やりましょう、学校と連携しましょうと言ってもやはり現実味がないとするならば、会社や事業のライフサイクルで変革期、創世期に当たるような事業を持ってらっしゃる方とコーディネートするのが現実的かなというふうに考えます。よろしくお願いいたします。

【青木会長】

ありがとうございます。ネクストハイスクールのポンチ絵の背景には、教育委員会事務局だけではない部局との連携あったと思いますけれども、そうですね、確か。

【事務局（永田高校教育創造室長）】

はい。御指摘のとおりで、当然教育委員会だけでは完結できないところがあります。今回特に、工業とか、農業、水産業、こういったところとの部局とも連携しながらこういったものも練り上げてきたというようなところでございます。

【青木会長】

はい。どうもありがとうございました。では、会場からですね、佐藤委員お願いできますでしょうか。

【佐藤委員】

初めまして。私は農業の方なので、専門的なところとかちょっと噛み砕いた話まで分かりませんが、自分がどういった視点で考えるかなというところでピンと来たのが 11 ページですかね。生産性向上とか、こういったところの学びという意味でこんな事業が是非あったらいいなというようなお話をさせていただければ。生産性向上なので、良い機械を入れて、それが達成されましたというのが結構会社にとっては有益なものになり得るんですけども、是非そういう生産性向上以外に例えばですけども、1 年生が課題を抽出して、2 年生でその課題に対応する何が出来て、3 年生でその導入した実証ができればこれはすごい面白いんじゃないかなと。地元の企業の課題というのは生産性だけでなく、例えば高齢化であとやはりどこかにつまづいている場所があるんで、高校生コンサルじゃないんですけども、将来自分たちがその産業にもし携わるとしたらここを改善したいを実際に企業に提案しちゃうというようなのは面白いんじゃないかなんていうふうには自分は思いました。これが何気にペラペラめくっていた時の 8 ページですかね。8 ページ中段の地域社会学科に通ずるものもあるんじゃないかなというふうには思ったので、やはり課題解決と一緒に考えるというここの取組なんかは自分自身は面白いんじゃないかなと思いました。

あと、自分ごとですけれども 10 ページにある陸上養殖なんかは自分が農業の分野ですけ

どもここ3年ぐらいはずっと興味を持って、いろんな展示会とか行っているレベルなので、自分たちも何かしら学べる機会ないかななんていうふうには思っております。以上です。

【青木会長】

はい。ありがとうございます。実際のカリキュラムに落とし込むこと。これが非常に重要になってくるという御指摘でありました。

続きまして、須能委員お願いいたします。

【須能委員】

よろしくお願いします。水産に限らず農業、林業、畜産、このような通常第一産業を学ぶ学生は、企業に就職する人もいますが、零細企業のいずれは経営者になるんです。そのために、例えば商業高校の先生から複式簿記の基本を教えてもらう。そういうような専門性のある話を学ぶ。あるいは工業学校の先生から機械のメンテナンスのキーポイントを教えていただくとか、あるいは畜産業の先生から生物を扱う場合にどういうところに気をつけて品質管理、衛生管理をするのかというような他分野の先生からの専門性の話を聞くことによって、逆に素人の質問によって先生方も気がつかなかった教え方というのに気づくと思います。そのことで、一方的なサービスではなくて相互の勉強のチャンスになるかと思います。

あともう1つお願いしたいのは、先ほどお話がありました小学校、中学校の生徒たちにこの実業の学校に興味を持たせるために、例えば水産学校の元国語の先生であった平居先生が「頑張る水産高校」というような本を書きました。これは、非常に国語の先生で文章力があって素人目から学校が楽しいか要するに水産がどれだけワクワクするかというようなことで、農業分野でも林業分野でも畜産分野でもそれぞれの学校に国語の先生がいます。国語の素人の目で見て、この学校の良さ楽しさ、例えば、学校の運動会にしろ文化祭にしろ学校行事の楽しさというものの事例紹介です。一般には、どこの学校でも専門の先生が書くから説明文になってしまいます。これでは子供には全然楽しみじゃないんですね。水産のことでも釣りのお話が出ましたが、本当に釣り好きの立場で魚の生態の話を書けばもっと面白いものが書ける。それは、生物の詳しいことが書けば、誰でも興味持つと思うんですね。そういう意味で、相互交流を是非進めていただきたいなと思います。以上です。

【青木会長】

はい、どうもありがとうございます。大変な貴重な御意見いただきました。会議体としても、事務局としてもですね、しっかり受け止めていきたいと思っております。それでは山田委員お願いいたします。

【山田委員】

先ほど。関委員がおっしゃっていたことと非常に近い話ですけれども、AI が人の予想を超えたスピードで今進化していて、人を超えると予測されていたのが当初 2040 年頃ですが、それが今 2030 年ぐらいにはもう来るのではないかとされています。人を超える AI が出てきた時、私たちの仕事・生活がどう変わるのか、まだ誰も正確な予測はできていない。この進歩は産業革命にも匹敵すると言われていますので、現在の中高生が社会に出る時、まさに 2030 年にどう対応出来る人材を育てておくのかは非常に重要だと思っています。そのような状況にあることを分かった上で、専門学科の学び、普通学科の学びをどうしていくのか。のコメントをさせていただきます。大学・企業と連携した先端技術に関する学びの充実は重要だと思います。また、今回の計画にある工業高校のアップデート、新しい装置を入れることは良い内容だと感じました。今後フィジカル AI、ロボット等が出てくるので高校生が触って学ぶことは必要だと思います。また、実際採用している企業、工場を見に行き、話を聞くということも、やるべきかと思います。ところでこのアップデートした装置ですが、1 回アップデートして終わりではなく、技術の進歩が非常に早いので、可能であれば毎年新しいものを入れる予算を確保しておいたほうが良いのではないかと思います。

会長がおっしゃっていた、「オープンな教育」は今回のキーワードではないかと思っています。県内でクローズではなく、首都圏や海外にも目を向けて、いろいろなところの話を聞くべきだと思います。新しい技術をオンライン講演で聞く、見る、ことも必要かと思っています。それから企業のメリットがどこにあるかという話がありましたが、連携により将来の人材教育に繋がるのがメリットだと思います。ただ、技術の進歩が速く、数年経つともう古くなる状況なので、世の中の変化に柔軟に対応して自分で考えて課題を解決する人を育成することが必要になると思います。以上です。

【青木会長】

ありがとうございました。一巡しまして委員の皆様からそれぞれ大変貴重な御意見回りました。ありがとうございます。先ほど、後藤委員にあらかじめちょっとお願いしておいたんですけれども、少し時間まだ大丈夫そうなので、1 分ぐらいで大西委員が御専門と後藤委員が重なるところおありだと思いますので、その辺りで補足的に御意見いただけますと幸いです。お願いいたします。

【後藤委員】

骨子案の 17 ページあたりのところだと思います。とはいえ、特別支援教育そのものの専門ではないので少し大枠の話になると思いますが、最初の方で会長もおっしゃったような高校間の互恵的な関係ということは、この点においても重要になってくると思います。それはつまり、特別支援学校側だけでなくこの併置される普通高校の側、そちらにとっても、メリットがあるということ、例えば手帳は持ってないけれども少し困り感があるというような子が、こちらの高校に行けば必要なサポートを受けられるということです。それはもし

かすると、18 ページにおける共同学習というところの中身の打ち出し方になってくるのかかもしれませんが、手厚いサポートを受けられるということと、両方で受けられるということとを全面に出したらいいのかと思いますし、と同時にその手厚いサポートの点だけを全面に出すのではなくて、その困り感の有無に関わらず、この高校に来れば、インクルーシブで公正な社会作りに貢献出来るそういう人になって育っていけるんだ。ここがそのいわゆるインクルーシブで公正な社会について学べる場所なんだということで、打ち出していくことも必要なんじゃないかなと思った次第です。大枠ですが以上でございます。

【青木会長】

はい、どうもフォローいただきありがとうございました。ずっとお待ちいただいていた副会長の田端委員にも、是非コメントいただければと思います。

【田端副会長】

10 年後、4 割減ということに加えて私立の無償化、それから広域制通信ということからすると、今の学校の数の半分以下でも良い状況だと思います。むしろ 0 ベースで、県立高等学校無しってところから、私は考えをスタートしても良いのかなと思っております。無しと考えた時に、どうしても私立とか広域制の通信でカバーできないのは、まずは専門学校です。専門学校はやっぱりいくつかやっていかなきゃいけない。それからもう 1 つは、いわゆるナンバーズクールというところは、立地の条件と伝統によってやはりニーズが 10 年後も、あまり心配しなくても良いかと思います。やっぱり、考えなきゃいけないのは、普通科だと思います。少し大きな話をさせていただくと、日本がここ 2、3 年で日本の貧しさが暴露されてきていていると、キャベツが 2000 円だったりとかで今後もっともっと、貧しさが露呈してきます。なぜかって言いますと、日本が大きなイノベーションを起こせないからです。小さなイノベーションは結構やっています。いろんな製品見るとすごいイノベーションがあるんですけど、大きなイノベーションができません。それから、スポーツ、芸能、ゲーム、アニメ。これ日本は世界的に先端です。どれも学校で教えたものではありません。学校が教えた、特に理数に関わる、文系もそうですけれども、学校で培っている学力というものがもう時代遅れです。私、5000 万を超える学力調査のデータを分析していて分かってきたのは、1970 年代の学力観でやっていて、ペーパーテストで大学も遅れていますけれども、日本の大学入試もそうですけれども、ペーパーテストを取る学力に中学生からやっています。ここを変えないといけないです。まず、中高の定期考査はなくした方がいいです。それから、ペーパーテストなくした方がいいです。それから教科書やめた方がいいです。それぐらい脱定期考査・ペーパーテスト、脱教科書の普通校で、有名大学に入れるあるいは海外の有名大学に入ってイノベーションを起こせるような体制を全部じゃなくてもいいですけども、今から 10 年後を見据えて、そこにやっばお金を投資していくべきだというふうに思います。ちょっとオーバーしてしまいますけど、まず進め方として古い進め方をやめる方がいいと

思います。高等学校の統廃合の仕方を行政が決めて、それを住民に説明する。また、次世代を担う中高生にそのデータを示して、半分以下になるっていうことで議論してもらう場を設けて、中高生の議論をやっぱりこの場で参考意見にした方が良いと思います。

それからもう1つは、特別支援＋普通科、これは非常にハードルが高いです。併設ということで、しかしこの併設を何名かの委員も言いましたけども、これを本当に意義ある併設にするということ。それが2点目でしょうか。

そして、Steam教育×ジェンダー平等。つまり日本の子供たちはペーパーテストでは、すごく国際的にもハイスコアです。女子と男子で比べると、国内の学力調査では女子の方が高く、国際調査では、若干劣るんですけども学力的には男女同じです。ところが、女子が理数系を嫌うのは国際的にもものすごい嫌っています。男子も数学の恐怖感が国際的に最も高いんですけども、まずそこをクリア出来るようなSteam教育を普通科ないし、特別支援＋普通科のところでやる構想があってもいいかと思います。そして、進め方の最初の5年のところをゆるゆる学級数を減らしていったゆるゆる並行するのではなくてもう10年後見据えた大きなプランで出発の方がいいと思います。以上です。

【青木会長】

非常に大きなところからの問題意識を御提示いただきまして、ありがとうございました。子供の意見を聞くというのはもうすでに前の会議体でも、アンケートをしていますので、その辺りもまた改めて再分析等としていければなと思います。

はい。どうぞ。半沢委員。

【半沢委員】

その点について、この進め方で中学生までは説明をして意見を聴取するということになっているようですが、今現在白石市でも学校再編に取り組んでおり、小中あわせて15校を3校に再編しようと、今説明会をやっている最中です。白石市で考えているのは、やっぱり小学生の意見も是非どういう形であったとしても、取り入れたいと思っています。我々は小学生、中学生、高校生、保護者、それから未来の保護者、地域の住民の方にも、これまで40回近く4月から説明会を毎日のようにやっていますけれども、子供の意見はすごく参考になります。今、田端副会長さんからもあったように、小学生にも是非実施してほしい。今文部科学省を新しい学習指導要領の改定をしていますけれども、小学生の意見聴取もやっていますね。Webであったり、ネットであったり、是非どういう形かはご検討いただいて、小学生も結構考えていますので、是非意見を組み取っていただければなというふうに思いますし、八巻委員からも小中というお話がありましたけれども小学校を外さないで欲しいなというふうに思っています。以上です。

【青木会長】

ありがとうございます。今の御意見については、事務局で検討していただければと思います。よろしくお願いします。それでは、一巡しましたので、その他御意見ございますでしょうか。よろしいでしょうか。それでは、この件については以上といたします。長時間ありがとうございました。

続きまして、議事の2番です。教育改革推進事業検討部会の設置について事務局から説明をお願いいたします。

【事務局（永田高校教育創造室長）】

資料3の2ページから御覧いただければと思います。先ほど、ネクストハイスクール基金の活用についてということで、グランドデザインの取組について説明させていただきましたけれども、この内容について、会議体を設置し検討していくという必要もございまして、条例の規定に基づきまして、教育改革推進事業検討部会を新たに設置したいというふうに考えてございます。部会の構成員については、条例の規定によりまして、10名以内ということで、会長に指名していただくことになってございますけれども、事務局の案といたしましては、記載させていただいている9名の皆様にお願ひできればというふうに考えてございます。

3ページ目については、公開のところになりますけれども、情報公開条例で原則公開という旨定められておりますけれども、今回の部会では、非公開で開催をさせていただきたいということで、提案をさせていただきたいと思います。その理由としては、ここに記載しておりますように、入札に関する情報など、不開示情報を取り扱うということが想定されますので、そういった理由から、非公開というふうにさせていただければと思っております。

それから、4ページ目御覧いただければと思います。先ほど、全体の審議会のスケジュール、申し上げましたけれども、本日この部会の設置についてお認めをいただきましたら、まず、検討部会の第1回を8月下旬から9月上旬というところ、開催をいたしまして、事業の実施方針、重点的に取り組む政策などについて御意見を頂戴できればというふうに思っております。その後、10月下旬から11月上旬に予定をしております第2回の親会の審議会の方におきまして、部会における検討内容を報告した上で、第1実施計画の中間案について、さらにご議論いただくというふうに、進めさせていただければと思っております。その後、12月頃に第2回の検討部会を実施いたしまして、この頃になりますと、国の方の来年度予算なんかは見えてきておりますので、そういったものも踏まえて、というところで御議論をしていただき、最後、翌年度5月に第3回ということで記載させていただいておりますけれども、8年度事業の報告というところと9年度事業の展開についても御意見をいただければというふうに考えてございます。説明は以上でございます。

【青木会長】

御説明ありがとうございました。この件について御質問、意見ございますでしょうか。オ

ンラインの委員もいかがでしょうか。よろしいですか。会場の委員の皆様よろしいございますか。それでは、御意見がございませんようですので、この件につきましては事務局案を御承認いただいたものといたします。

それでは、本日予定されておりました議事については以上でございますが、私も委員の皆様からの御意見を拝聴しておりまして、短時間ですが、お時間いただいてコメントを差し上げたいと思います。

まず、やはり今後、実際のこういう新しい高校教育モデルを展開していく上で、重要なのは何よりも教職員の皆様のお力によるところが大きいと思います。その上でもやはり働き方改革の観点からも教員が特に教員が過度な負担に陥らないようにということで、特に新しい多様な教育を展開するということは、少量多品種のサービスの提供ということでありますので、やはり先生方だけではなく色々なスタッフも雇用いただいて、先生方が正規のカリキュラムに集中していただくという、特に午前中に弱い生徒を考慮するならば、現在の放課後が本当の正規の授業時間になるかもしれないわけですね。多様な学びニーズということで、1人の先生がフルタイムでというよりは、いろんな形の勤務形態も含めて御検討いただければと思います。

それから、コミュニティスクールのことが御紹介ありましたけども、やはり生涯学習課のmatterだとは思いますが、この件では、色々な観点からコミュニティスクール、特に高校におけるコミュニティスクールというのは、テーマコミュニティということでありまして、多様なステークホルダーが関わるということでありますから、先進事例踏まえてですね、より設置率等も含めて検討いただければと思います。

あとは、場としての高校を考えた場合には、例えば1人になれる場所を作るというのも他県の先進校でありますし、あるいは、先ほどの併置校等で独立性ということも重要だと、一方で御指摘ございましたので、やはり施設整備課と色々な連携協議ということも必要になってこようかと思います。以上でございます。

それでは、次回の審議会では、実施計画の中間案を元に委員の皆様から御意見をいただきたいと思います。これを持ちまして、私から事務局にお返ししたいと思います。ありがとうございました。

【事務局】

限られた時間の中で、貴重な御意見をいただきましてありがとうございます。

3 その他についてですけれども、何か連絡事項等が終わりの方はいらっしゃいますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、事務局の方から2点ご連絡を申し上げます。

1 点目でございます。議事の中で御説明いたしました検討部会につきましては、第1回の開催を8月下旬から9月上旬頃に実施したいと考えております。部会の委員の皆様には個別に日程等の調整のご連絡をさせていただきたいと考えておりますので、よろしくお願い

をいたします。

2 点目でございます。次回の審議会の日程でございますが、10 月下旬から 11 月上旬の間で開催を予定しております。詳細な日程につきましては、9 月頃に委員の皆様にご連絡したいと考えておりますので、こちらにつきましてもよろしくお願いをいたします。

それでは以上を持ちまして、令和 8 年度第 1 回県立高等学校将来構想審議会を閉会いたします。本日はお忙しい御出席を賜りまして誠にありがとうございました。

4 閉会